の言の後に「如此詔之時」とある点などから、詔字と対応

る。曰は上から下に対する言であり又奏は下から上に対してあらわれている。用字法から、「曰」を用いてあるのは正しくないと思う、こゝでは、下から上への言であるから当然「奏」と対応させて、「白」にした方が正しいと思われる。又前後の文脈又意富祁命の用字法からみても下から上に対する言として用いたい。

〔三十二年度卒業〕

懸詞の研究

―古今・新古今を資料として―

長野倫子

一

古今・新古今時代における懸詞とはどのようなものか。又両集間の時代差は懸詞にどのような差異を生み出させるものであろうか。本稿は、懸詞を分析しつゝ、同時に二集を比較検討していこうとするものである。

なお、その主な検討分野として次のものを揚げる。――数的な問題。種類とその慣用性の問題。構成に関して。品詞から見た懸詞。――これらの事につき、順次述べていきたいと思う。

二

まず数及び作者に関して検討していくに、古今の総歌数一一一一首中、懸詞の用例は二三八例、新古今は総歌数一九七九首中、用例三三三例である。しかし考えねばならない事は、新古今には万葉。古今時代の作者の手に成つたものが多く存在する事である。こゝで意図するところは、古今、新古今、両時代における懸詞の比較考察であるから、当然、前時代のものを抜出することが必要となってこよう。なお、こゝでは新古今のみが問題となる、

総歌数一九七九首中、一一二首（概数）が万葉・古今時代のものであるから、残る一八五七首を新古今時代のものとみてよかろう。

用例における前時代のものは、万葉四例、古今十八例である。

以上の抜出により、古今及び新古今は、時代的、数的に同等の立場に立つことが初めて可能となるもので、古今と古今時代とはほゞ一致し、新古今においても同じ事が言えるのである。

こゝで、二集各々の総歌に対する用例数の百分比をとつてみるに次の如くである。

第一表

	総歌数	用例数	百分比
古今	一一一一	二三八	二一・四
新古今	一八五七	三二一	一七・二

右の表でわかるように懸詞の詠み込まれている用例の全歌数に対する比は、古今がやゝ多くなっている。

では、これらの内容はどうなっているであろうか。

懸詞は一般に広く認識されている如く、単純な構成によるものばかりではないようである。一語に二義を含ませるものは、最も素朴な形であり、更に初歩の段階と言えようが、あくまでも、それは初期の一時期における形態であって、発展して行く過程には更に復雑な構成によるものが多く存在している。

古今、新古今における懸詞の、概略を知るため、種類に関する表の一部を提示してみる。

第二表

品詞記号	同類番号	種類		構成記号	古用例	新古用例
ロ	1	待つ	松	1a	7	12
ニ	2	待ちかね	待兼山	3a		1
ロ	3	待つ	待乳山	1d		2
ロ	4	待つ	松（島・尾山）	1d		2
ロ	1	洩る	守山	1d	1	
イ	2	漏（洩）る	守る	1a		5
ロ	3	守る	守山	1d		1
ロ	4	洩り	森	1b		2
ロ	1	藻屑	裳	1a	1	
ニ	1	涙ぞ―もろき	諸鬘	2b		1

右表の品詞記号は次のような区分による。

イ、動詞と動詞を懸けたもの。

ロ、動詞と名詞。

ハ、名詞と名詞。

ニ、その他。

又、構成記号とは左記のような分類の試みによって附したものである。

1. 一語と一語を懸けたもの。

a 一語と一語（例、待つ↑↓松）

b 一方の一語は活用を変えて懸けられたもの（洩り↑↓森）

c 懸けられる方に二義を含ませたもの（立つ↑↓起つ↓起つ）

d 一語と一語の部分（待つ↑↓松島）

2. 一語と二語を懸けたもの。

a 一語と二語（逢ふ日↑↓葵）

b 一語と二語を懸けたものであるが活用変る（空蟬↑↓現せ身）

c 一方の二語は一語と一語各々の部分と一語を懸けた（起き↑↓熾火）

d 二語の初め又は後の部分と一語を懸けたもの（擣つ↑↓宇津の山）

e 其他（〜しつ↑↓しつのおだまき）

3. 二語と二語を懸けたもの。

a 二語と二語（待ちかね↑↓待兼山）

b 該当するものなし。

c 一方の二語は一語と一語各々の部分が懸けられる。

d 一方の二語は其前又は後部分が懸けられる（歎きこる↑↓木をこる）

4. a 二語と三語を懸けたもの（韓衣紐結ふ↑↓日も夕暮）

ハ、名詞と名詞。

さて、種類における古今、新古今、各々の数を検討するに、古今一二一・共通三三・新古今一八四。でありまず最初に目につくのは共通の種類の意外に少ないことであろう。このことは、懸詞にかなり移行性のあることを示している。又それと共に新古今において古今では見られなかった類のものを多数創造していることはこの集の懸詞に対する意識度の高さを物語ると言えよう。

才二表にも見る如く、同類の懸詞の中にもその用例数においてかなりの開きがある。便宜上、一集に全く同一の懸詞が三例以上存在する場合にはそれを慣用性ありとし、二例のものにはそれを慣用される傾向にあるもの。として取扱いたい。これに関し二集を見るに

才三表

	二例以上	二例	百分比
古今	三二	十六	五・八
新古今	五八	四二	十一・一

新古今においては二例のものゝ二例以上のもの、すなわち程度を問わず慣用性を有する全てのものに対する比が古今のそれに比べるとかなり高くなっている。

古今では慣用度の高いものと低いものとの間にかなり大きな開きを有していたのに対し、新古今のそれは二、三の例外を除いては一般に均等化されたと言える。この事は換言すると、古今集時代においては特殊な用例が度々用いられ、やゝもすると固定化の傾向にあった懸詞が新古今時代になり、新たな認識の下に再び蘇ったと言えよう。

これ迄見て来た如く、懸詞にはごく普通に懸詞として慣用化されたものが意外に多く存在する。その最も代表的なものとして、「飽き←→秋」。「待つ←→松」等を揚げることができるが、これらはなぜこれ程一般化しているのであろうか、それらの間には何か共通の理由があるように考えられる。

そこで、先に揚げた才二表に基いて慣用化されるもの、又はその傾向にあるものにつき、その懸詞の構成に関して見ていきたいと思う。

待つ	松	1a
待つ	待乳山	1d
待つ	松（島・尾山）	1d
漏（洩）る	守る	1a
洩り	森	1b

右表は、ごく一例に過ぎないがその構成記号を見るに全て、一語と一語を懸けたものである。もちろん、これにも例外はあるがしかし、例外はいずれも用例数二例のもので、三例以上になると、変型はあるにしろ、一語と一語を懸けたものになっている。

このことは、一般に慣用され易い語は懸けられる二語の詞の構成が単純であることを明らかに示している。構成と慣用度との関係は以上の如くである。

次に構成において二集を検討するに、

種類	古今	新古今
1	116	150
2	25	54
3	18	8
4	1	3

なお、これは種類数である。まず目につくのは新古今の3に属するものゝ数の激減である。全体的種類数は新古今が大であるから、その絶対数だけを比べてみるわけにはいかないが、両集を通じ、1～4の数の示す如く、漸次減少していく傾向を比較することは可能である。

しからば、新古今の3は注意すべきではあるが、必ずしもこゝに、問題となる理由が存在するとは言えない。全般的に見て構成における二集の差はほとんどないと言えよ

う。

今迄、懸詞の種類や構成に関した事について述べてきたが、こゝで更に、品詞別に検討していくことも意義あることだと思う。

懸詞は、その大部分が動詞と名詞の二品詞の組み換えにより成っている。その組合せには、一、動・名。二、動・動。三、名・名。といったものがあるが、この二品詞の構成によるもの以外に非常に復雑なものもある。しかし、これらは稀少であるので以下、その他として取扱いたい。

動詞・名詞の組換えにより、先に述べた三例ができるのだが、こゝに興味ある事実がある。すなわち、この三つの場合、動詞と名詞を懸けたものが、その用例、最も多く、しかもそれは、古今、新古今を通じて言えるということである。

では、品詞別に見た用例数を揚げてみると

	動・名	動・動	名・名	其他
古今	95	63	57	34
新古今	133	75	51	65

（この表は、その特殊性を考慮に入れ、才二表で、一組として取扱ったものでも二つに分割して数を読んだものもある。例・立つ—起つ—裁つ）

いかなる理由により、動詞・名詞のものが多いのか、という点は今後なお研究を要する問題だと考えるが、こゝで次の事を提示する。すなわち、動詞と動詞。名詞と名詞を懸けたもの等のように、懸詞の二語が同じ品詞で成っている場合は、ごく特殊な例外を除き、全てが同音の、しかも同数による組合せであること。又、それとは反対に、動詞と名詞の如く、異った二品詞の組合せの場合は前者のそれのように、完全に懸けられることはまずない。もちろん、これに準ずるものはあるが、それは、動詞を活用させた形と懸けたものであり、その他、一語と部分とを懸けたものも多くは、動詞と名詞による懸詞の中に存するものである。

これらの事柄は、ある観点からすると、全く当然な事と言えるかもしれないが、これも懸詞の性質を究明するための一つの手掛となるだろう。

三

以上、述べてきたことをまとめよう。まず、種類を見るに、新古今には、古今に全くなかった新しい試みが非常に多くなされている。又、慣用の度合いを見るに、古今に度々使用された懸詞は、特定のものに片寄る傾向にあったのに対し、新古今では、それが均等化された。

しからば、古今においては、懸詞にさほど関心が払われ

なかったのかというと、そうではない。事実、古今は新古今より、ごくわずかではあるが、全歌数に対する用例数の比は大なのである。

このように、関心度はどちらも大差はなかったが、使用する際の態度が異っていたと考えてよいだろう。すなわち、古今では、人から人へと、単なる摸倣として使用される傾向が強かったのに対し、新古今では、もはや、単なる摸倣の域を脱し、新しい段階へと移行するとみてよかろうと考える。

〔三十二年度卒業〕

八代和歌集に於ける『菊』考

平田芙美子

八代和歌集に於いて菊は如何に表現され、人々はそれに対して如何なる思想を抱いていたか、また当時の菊はどういうものであったか調査し、菊特有の歌の流れを考察したいと思う。

一、菊の歴史　　二、三、抜萃してみる。

菊の語源は何であろうか。『和名抄』巻才十　草木部才二十四草類云、菊「四声字苑」云、

菊　挙竹反、木草経云、菊有白菊紫菊日精草也
加波良与毛岐一云、可波良於波岐

『和名抄』にも字音由来の和名を何とも言つてなく、私の調査では、菊の語源を明確にすることは出来なかつた。

次に菊の歴史について検討して見よう。

八代集に於て菊は八十四首よまれている。ここで奈良時代に眼を転じ『万葉集』について考察したが一首も見渡らない。しかし菊の異名の一つ「モモヨグサ」が明らかにされた。

万葉集　巻二十、四三二六　生玉部足国

父母我・等能能志利弊乃　母母余具佐
母母与伊弖麻勢　和我伎多流麻弖

諸註釈書によると、いずれも疑問となつておりこの場合かならずしも菊とは考えられない。また『大言海』に「後水尾天皇御製「ならノ葉（万葉集）ノえらびニ漏レシ、菊ノ花、残レル梅ノ恨ミヤハアル」とあり、『万葉集』に菊はないとしておられる。

では菊は何処の原産であり、いつ頃日本に輸入されたものであろうか。

『植物学九十年』『続植物記』（牧野富太郎著）『学習大辞典植物篇』『兒童百科辞典』の仁徳天皇の頃（三一三―三九